

進行相と丁寧効果

中野 清治

(平成元年12月6日受理)

要 旨

英語の進行相の中核的意味は「進行・継続」であると一般に言われており、事実そのとおりである。しかし、進行相には他に付随的意味がいくつかあり、「非断言的・押し付けがましさが無い・遠慮がち・丁寧」といったニュアンスを伝えると各種の語法書・文法書は指摘している。

I'm hoping you'll be willing to join us.

I was hoping you'd lend me some money.

When will you be paying back the money?

Should you happen to be passing, do drop in.

この付随的意味を「進行相の丁寧効果」と呼ぶことができるが、この効果は進行相の動詞構造そのものが持つ本質的な意味、すなわち「時間幅」「未完了」にまで遡ることができるのではないかと、本稿はこのことを検証するとともに、EFL 学習者がとくに不得手とされている未来進行相に重点をおいて検討してみた。

キーワード

進行相, 時間幅, 未完了, 緩衝作用, 婉曲, 丁寧

1 序

効果的なビジネスレター (BL) を書くための要素として Clearness, Conciseness, Correctness, Courtesy, Consideration の五つの要素が古くから唱道されている。これらの特質を英文に表現するには、用語上・統語上・文体上様々な工夫がこらされるであろうが、本稿では 5 C の一つである Courtesy, 言い換えれば Politeness が英文法のいわゆる Aspect (とくに進行相) とどのような係わりがあるのか、あるいは結論的に言えば、進行相はなぜ Courtesy 効果を生み出すのかを考察してみたい。

2 動詞構造

Allsop¹⁾ (148) は英語の動詞構造には二つの意味要素があるとする。

- (a) Time——動作が行われる時を示す。
- (b) Attitude——動作に対する話者の関心、その動作を話者がどのように見ているか(あるいは解釈しているか)を示す。

Lewis²⁾ (101) はもう少し細かく分析してて上記の(b)をさらに具体的に示している。

- (1) 単純時制 (Simple Present or Simple Past) の動詞構造によって話者はある状況・出来事・行為等の事実

の面を表現する。

- (2) Aspectによって話者はある動作の時間的特徴をどう解釈しているかを示す。
- (3) Modals (法助動詞) の使用によって話者はその状況の non-factuality かつ non-temporal な面に対する自分の心的態度 (可能性・必要性・疑念・確信等) を表明できる。

以上の事を例文によって示せば

- (1a) It *rains* a lot in the north of England.
 (1b) It *rained* last night.
 (2a) It *was raining* when the plane took off.
 (3) I *can't* come today but I *could* come tomorrow.

(1a) (1b)は単純時制が用いられており、単に事実を叙述しているにすぎない。(2a)は過去における「雨降り」の事象に時間幅があったことを〈be+ing〉の構造要素で示している。この時間幅は必ずしも動作・行為に要する現実時間を表すのではなく、その動作・行為を話者がどのように受け取っているかということ、すなわち心理的な時間幅をも表すことができることに注意しなければならない。たとえば、「雨の中女王がお着きになった。折しも爆発が起きた」といった状況を想定してみよう。

- (2b) It *was raining* when the Queen arrived.
 (2c) The bomb exploded while the Queen *was arriving*.

いずれの場合にも女王の「到着」に要した時間の長さは同じはずだが、話者の主観的な受け取りかたには違いがあって、心理的に長くかかったと思われる(2c)に〈be+ing〉の構造が選ばれたことが理解できる。

(3)は Modal が含まれているが、〈I+come〉という行為が事実としてではなく話者

の判断として示されており (=non-factual), 過去形 could が tomorrow と共に用いられていることからして、この Modal は話者が上記行為を non-temporal として受けとめていることを物語っている。Could, would, should, might はそれぞれ can, will, shall, may の過去時制というふうに伝統的にみなされてきたが、subordinate clause 内で用いられている場合は別として、法助動詞はすべて、話者の発話時 (=現在) における判断を表す、という本質を見逃すべきではなからう。上の場合〈I+come〉の可能性は can よりも could のほうが小さいと話者は判断しており、Lewis は could (would, might, etc.) 及び一般動詞の過去形を Remote form と呼ぶことを提唱している。過去形は時間的・心理的に隔たりが感じられるからである。

心理的な隔たりは、話者 (書き手—以下同断) の側の控えめ・遠慮の気持ちを表すものであり、自ずと発話や書かれた文の表現の仕方に現れてくるものである。その表現形式が聞き手 (読み手) には Polite と映るのであり、とくに BL において Modals の Remote form すなわち過去形が多用される理由となっている。

次頁に示すのは、時制と進行相が競合して politeness の効果を生みだしている姿を表している (Marquez & Bowen, 61³⁾。

“Hope” とともに “wonder” も依頼を表す際のいわゆる softeners として有用なものだが下記引用の Degree of Politeness に進行相が係わってくるのは何故であろうか。上に述べたように、進行相は心理的な時間幅を含意することに加えて、出来事・行為が未完了であることを明確に示す動詞構造である。したがって、時間幅と未完了という特性が主語と行為がもろに結びつくのを防ぐ一つの緩衝作用として入り込み、叙述の露骨さを緩和し、叙述に婉曲な印象を与えているのではないか、という仮説をたててみたい。

Degree of Politeness	Verb Form	Meaning	Example
Polite	(4a) Simple Present	Most direct request	<i>I hope</i> you'll join us for dinner Friday.
	(4b) Simple Past	Tentative	<i>I hoped</i> you'd be able to join us.
	(4c) Present Continuous	Tentative, no commitment implied, self-deprecatory	<i>I'm hoping</i> you'll be willing to join us.
Most Polite	(5) Past Continuous	Most tentative, doubly self-deprecatory	<i>I was hoping</i> you'd lend me some money.

3 現在進行相

進行相の意味・特質についての捉えかたは学者によって様々であるが、process (進行・推移・過程) や duration (持続・存続・継続) といった基本的な意味に加えて、非完了・同時性・感情的色彩・生き生きした描写・強調といったニュアンスを伴うことはよく知られている。黒川⁴⁾ (下: 204) は進行相について“Varients(sic) in Current English Grammar” (Rodinov, A., 1981) から興味深い文章を引用しているので一部転記してみる。

The Continuous form may be less categorical and direct, less forceful and pressing than the Indefinite form. . . . Sometimes the Continuous form is felt as more polite than the corresponding Indefinite form.

これは実に示唆に富む卓見であり、DPBL⁵⁾ から引用する以下の例文で進行相の諸相を検討しながら、上述の仮説の妥当性を検証してみたい。

- (6) *We are sending* under separate cover one of their catalogs with our order blanks as well as the terms and conditions of sale. (199)
- (7) In line with your request we *are reduc-*

ing our F.O.B. prices to you 5 % retroactive to June shipment. (299)

(6)は現在進行相の典型といえるもので「送る」という行為・活動は発話時(執筆時—以下同断)と同時進行ともとれるし、近い将来に発送するという現在の計画・取り決めを表すとも解釈できる。進行相は未完了を含意するので後者の解釈が可能になるわけであるが、前もって計画できるような行為を表す動詞がこの〈将来の計画・取り決め〉を表す現在進行相に用いることができる(安藤⁶⁾, 127)。

(8) This material *is being provided* free of charge. (422)

(9) Efforts *are now being made* to establish procedures that will alleviate this situation. (375)

(8)にはDPBLの解説欄で「無料でお送りします」という意味だが、進行形にしていることで、今回は無料だがこの次はわからないという含みを持たせている。‘is provided’ とすればいつも無料で送っているということになる」という説明がなされている。もちろんそのような読みは、それに相応しい文脈があってはじめて可能といえよう(Huddleston⁷⁾, 75)。(9)も(8)と同様に発話時を含むある期間内の進行を表す。上例のようにその行為が現在のことであれば中断せずに継続していくことを表すが、過去時制で用いられると中断され

ることを示唆する。

e.g. She *was driving* his car when she suddenly felt ill.

ついでながら、(8)(9)の受動態は叙述に客観性という特質を付与する働きがあり、相手の信頼をとりつけるのに有益であろう。

(10) I *am hoping* something can be done about the early occupancy problem. (466)

(11) Your documentation requirements *are beginning* to strike us as being slightly excessive. (444)

(10)は前節で既述した *softener* を含むものであるが、押し付けがましさを避け、遠慮した響きを持つのは 'I hope' というような事実を直叙する Simple Tense を用いないことから生じる効果といえよう。(11)には DPBL に「いささか多すぎるのではないかという感じを受けております」という実につけた訳をつけているが、この動詞構造には相手への強い配慮と遠慮が働いているように思われる。安藤 (115) は Ota (1963) の説を紹介して「進行相は動作の「プロセス」を表すとす。プロセスとは、動作が既に始まっており、現在完結に向かって動いているが、まだ完結はしていないという意味である」と述べているが、これは Rodinov の言う進行相が持つ非断言的なばかした表現の特徴となって現れる。下に(11)の類例を追加するが、Remote form を用いることにより遠慮の気持ちがさらに強く働いている。

(11a) Thank you so much for your letter. We *were beginning* to wonder if you'd had our last letter! (Oxf. W, 45)⁸⁾

(11b) I was awfully glad to get your card. I *was beginning* to think you had forgotten me. (Oxf. W2, 23)⁹⁾

4 未来進行相

<will be + ing> の動詞構造の表す意味を

CGEL¹⁰⁾ (4.46)は次のように示している。

(a) 進行相につきものの '時間枠' と will で示される '未来' の意味を結合した使い方。

(b) 'Future as a matter of course' を表す。Will を意志・意図・約束等の意味に解することはできない。

When *will* you $\left\{ \begin{array}{l} \textit{pay back} \\ \textit{be paying back} \end{array} \right\}$ the money?

(下段の方が more tactful である)

NB. The next train to London *will* $\left\{ \begin{array}{l} \textit{arrive} \\ \textit{be arriving} \end{array} \right\}$ at platform four.

人間の係わりがない未来の出来事を表す場合は、両者に差異はない。後者の方にややインフォーマルな傾向があるという程度である。

(b)に対するコメントにあるように、下段のほうが more tactful であるのならば、この動詞構造を BL で大いに利用する価値がある(中村他,¹¹⁾ 29ff.)。

Lewis (118) はこの動詞構造について「話者は発話時以前の状況を悟っている」と核心を突いた説明を与えているが、そのことを裏付ける例文は示していない。この用法は BL あるいは私信を問わず広く見られるが、まず用例をあげてみる。

(12) I was very happy to learn from your letter of June 3 that you *will be visiting* our laboratory following the International Conference to be held in Kyoto. (95)

(13) With regard to your forthcoming visit, our Mr.R.T. *will be meeting* you at Narita on September 8 to assist you. Your schedule indicates you *will be flying* on NW007 scheduled to arrive at

5 : 45 P.M. Tokyo. To insure quick identification, Mr. T *will be carrying* a small LEMCO flag. (85)

- (14) We have arranged for you to stay with the following host family : (address)

They *will be expecting* you on the Sunday afternoon or evening and will be happy to pick you up at Margate Station. (Oxf. W, 51)

- (15) We are pleased to inform you that you have been registered on the course of your choice. You *will be staying* at Myrtle College Residence Hall. (Oxf. W, 51)

- (16) Please let us know what hotel you *will be staying* at so that we can make the necessary transportation arrangements for you. (93)

上の五つの例文で分かることは、<will be+ing>の動詞構造は、—ing形で示される将来の活動・行為を行うための根拠が話者・聞き手双方で、あるいは少なくとも話者の方で了解済みであるようなコンテキストで用いられている、ということである。ある事情のもとでは、例えば、空港に出迎える約束をしたとか、誰かを派遣することに決めたとかいう場合、その後必然予想される一連の行為があるはずである。そうした約束や取り決めが予めなされていて、それに基づいて将来に生じるであろう活動・状態、すなわち状況の推移を予告する動詞構造がこの<will be+ing>形であろう。

この動詞構造は我々日本人ばかりでなく、母語は何であれ英語を外国語として学ぶ学習者にとってもかなり難しいらしく、Bolitho & Tomlinson¹²⁾ (114)は次のような例を挙げてコメントを与えている。(Q=foreign learner)

- (17) Q : Where are you going?
A : To town.

Q : Will you go to the post office?

最後の問いは断固とした要求を表すと解されるので、ここでは幾分ぶっきらぼううに響き、適切ではない。この学習者はきっと

Will you be going to the post office?(in the course of your visit to town)(Italics mine)

といった neutral な質問をしているつもりで上記のように言ったのであろう。この種の文脈における未来進行形は、動詞構造の面から説明するのが困難なので、相当に力のある学習者でもめったにマスターすることがない。

この見解は前述の CGEL の(b)の説明と規を一にするもので、われわれ日本人がこの難しいとされる動詞構造の意味を体得するには、たとえば(12)~(16)のような適切な文脈を伴った例文に多く接することが是非とも必要のように思われる。

<be+ing>を従える Modals としては、will 以外に should が多いようである。

- (18) Your letter has been passed on to them for immediate action. You *should be hearing* from them shortly. (277)
- (19) The \$72 deposit was sent out today. You *should be receiving* it shortly. (468)
- (20) We reached a preliminary understanding that the option would be taken up and the company in question *would be publishing* an edition in the United States. (251)

DPBL は(19)について「進行形で、すぐにも届くというニュアンスを出している」と説明しているが、それは shortly という副詞がその意味を担っているのであって、ここでは 'You should receive' (是非受け取って下さい)とはまったく異なった意味を担わせるために、すなわち 'future as a matter of course' (きっとお受け取りになるはずです)

を表すために進行相が用いられているのである。(20)の *would* は時制の一致によるものであろう。

法助動詞 (Modals) は話者の判断や心的態度を示すが、その後が続くいわゆる進行相は本動詞で表される行為や出来事または事態へと主語が方向づけられることを表している。未来進行相は、将来生じる活動や状態に対して話者がコミットしないで (Thomson & Martinet¹³⁾ (§ 213) は ‘future without intention’ と呼ぶ), いわば推移して行く事情に責任をあずけることによって話し手ないしは主語との係わりを薄くし、ふんわりとした柔らかなニュアンスを添えていると思われる。

未来進行相についてではないが、過去進行相にも同様の傾向が見られることについて、Thomson & Martinet (§ 181) は次のように述べている。

The past continuous can be used as alternative to the simple past to indicate a more casual, less deliberate action :

I was talking to Tom the other day.

The past continuous here gives the impression that the action was in no way unusual or remarkable. It also tends to remove responsibility from the subject. In the above example it is not clear who started the conversation, and it does not matter. Note the contrast with the simple past tense, *I talked to Tom*, which indicates that I took the initiative.

Rodinov が、進行相は時に polite な感じを与えと言っているのは理由のないことではない。話者は、事象を主語と動詞が直接結びついた統体として把握しているのではなく、主語と本動詞で示される行為・事態が、進行相で示される不定の時間幅の中に当然生じる客観的な出来事として、つまり主語がその行

為・事態に対してまともには責任を引き受けていないということを示している。こうして陳述を “less categorical and direct, less forceful and pressing” なものにするといった効果を生みだし、それが polite な感じを醸しだしていると思えるのである。

5 進行相不定詞

以上で観察した事柄が進行相不定詞を従えるいわゆる Catenative Verbs に適用できるかどうかを検討してみたい。

- (21) We hope *to be hearing* from you soon. (171)
- (22) Enclosed is a brief of the material I expect *to be covering* during my lecture on June 1. (439)
- (23) Should you happen *to be passing*, do drop in. (Perkins,¹⁴⁾ 55)
- (24) How would you like *to be playing* blackjack tomorrow? (AmW,¹⁵⁾ 48)
- (25) A : Would it be possible to stay in my room until 11 : 30 or so?
B : I'm afraid not, sir. The staff will have to *be cleaning* the room. (AmW, 42)
- (26) I have just read your letter informing me of the sad fact that you will have to *be returning* to Australia due to health reasons. (605)
- (27) Simon, this is Professor Ishii. He's going to *be teaching us politics*. (山口,¹⁶⁾ 1-5)

(21)~(24)では Catenative Verbs の中でも hope, expect, like 等期待・願望を表す動詞と進行相不定詞が結合しており、(25)~(27)では Semi-modals と進行相が結合しているのが特徴である。中には BL ではないものから取られた用例もあるが、それは進行相が丁寧さを表すため、BL に限らず、会話表現を含めて広く用いられている証左といえる。いずれの

例も、期待・願望・義務等未来志向を表す動詞（その意味で心的態度を表す法助動詞に通じる）に続く進行相不定詞であり、単純不定詞を用いた場合に見られるであろう（行為に対する願望の露骨さ）〈行為をむきだしにして示す圧力〉〈言い切るような断言的なひびき〉が緩和され、婉曲で柔らかなニュアンスになっていることは否めない。主語と、動詞によって示される活動との間に、進行相という時間幅ないしは心理的クッションをおくことによって、そのことが可能になるのではないだろうか。

6 結 語

BLにかなりひんばんに用いられる進行相

がCourtesy効果を生み出す一つの要因になっていることを検討してみた。第二節で、進行相はその構造が持つ時間幅・未完了の意味が陳述の非断言・客観化をうながし、主語の活動・状態を述べる際に一種の緩衝作用の機能を果たし、叙述の露骨さを緩和しているのではないかという仮説を設けた。そして第三節以降「現在進行相」「未来進行相」「未来志向のCatenative Verb+進行相不定詞」の諸例を検討し、上記の仮説の妥当性を例証してみたつもりである。ただし、進行相が持つCourtesy効果はあくまでも付随効果であって、進行相の中心的意味は‘process and duration’であるという点は銘記しておくべきであろう。

引用文献・脚注

- 1) Allsop, J. *Cassell's Students' English Grammar*. Cassell, 1983.
- 2) Lewis, M. *The English Verb: An exploration of Structure and Meaning*. Language Teaching Publications, 1986.
- 3) Marquez, E.J. & Bowen, J.D. *English Usage*. Newbury House Publishers, 1983.
- 4) 黒川泰男 「英文法再発見」(下)三友社出版, 1987.
- 5) Kurdyla, F.J. *Dictionary of Proven Business Letters*. 朝日出版社〔DPBL〕, 1986.
- 6) 安藤貞雄 「英語教師の文法研究」大修館書店, 1983.
- 7) Huddleston, R. *English Grammar: an Outline*. Cambridge U.P., 1988.
- 8) Gruber, D. & Dunn, V. *Writing: Elementary*. O.U.P.〔Oxf. W〕, 1987.
- 9) Boutin, M.C., Brinand, S. & Grellet, F. *Writing: Intermediate* O. U. P.〔Oxf. W2〕, 1987.
- 10) Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & Svartvik, J. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman〔CGEL〕, 1985.
- 11) 中村巳喜人・則定隆男 「入門商業英語」英宝社, 1982.
- 12) Bolitho, R. & Tomlinson, B. *Discover English*. Heinemann, 1983.
- 13) Thomson, A.J. & Martinet, A.V. *A Practical English Grammar*⁴. Oxford U.P., 1986.
- 14) Perkins, M.R. *Modal Expressions in English*. Francis Pinter, 1983.
- 15) ソニー KK 教育システム研究室 *The American Way* (Pt. 1) SONY, 1985.
- 16) 山口俊治・Timothy Minton 「コミュニケーションのための口語英作文」成美堂, 1988.

Progressive Form and Courtesy Effect

Kiyoharu NAKANO

(Received December 6, 1989)

ABSTRACT

The progressive form of English verbs has as its central meaning 'process and duration' and it is often referred to as denoting an action happening on a specific point in time. But it is also accompanied with some other shades of meaning, depending on the context and the kind of the verb used.

We can cite one of those meanings as 'less categorical and direct, less forceful and pressing, more polite and tentative' than the non-aspectual forms. This additional meaning may be called a courtesy effect of the progressive aspect. Here are some typical examples :

I'm hoping you'll be willing to join us.

I was hoping you'd lend me some money.

When will you be paying back the money?

Should you happen to be passing, do drop in.

What element or elements of the verb structure produce such an effect? It seems to be crucial, in discussing the effect, to hypothesize that the progressive verb form denotes incompleteness of an action or an event, as well as an indefinite period of time both physical and psychological. Special emphasis is laid on the future continuous.

KEY WORDS

Time span, Incompleteness, Buffer effect, Non-commitment, Politeness.